

## 脳梗塞の息子（五）大地震／北海道旅行

中村 アキヤ

平成23年1月1日

平成二十三年になった。哲也も除夜の鐘が鳴って直ぐに近所の西向天神社に初詣。昨年は意欲がありながら歩けなかったのだが、今年は人並みの速さで歩いて行けた。両親とは別に奉納金を用意し榊を奉納し片手で柏手を打って、帰りに甘酒を貰って満足して帰宅した。

夜は親戚が集まりドンチャン騒ぎ、幸い今日は土曜日なので哲也も気兼ねなく酒を飲んでいた。疲れたようだけれどとても楽しそうだった。

1月4日

初台病院に行く。この日一羽の白鷺が家の周囲に出没し、気が付いたら池の大型の金魚や鯉がかなり食われていた。十数匹いたのが二匹に減ってしまい哲也はガツカリしていた。

1月6日

母親が本郷三丁目にゆくのに哲也は付いて行き、金魚坂の金魚屋を訪問し、金魚を三匹購入し補充した。

1月8日

赤羽の高木先生が哲也の喉に針を刺した。哲也はグウグウ変な声をだして苦しんでいるように見えた。が、実際は苦しくはなく声が自然に出ているのだった。

その後声ははっきり出るようになりご機嫌で帰宅した。

この頃の初台で出される宿題は難しい漢字を書き取り発音することで、パ、バ、サ行の発音し辛い言葉が並んでいる。「判らないな」といいながら熱心に勉強している。このところ哲也の回復が顕著で希望が持てる。家族全員やつと精神的に余裕が持てる状況になってきた。

1月11日

哲也は助詞と格闘している。「帽子が飛んだ」をクリアした後「跳び箱を跳ぶ」が、どうしても「跳び箱が跳ぶ」になってしまう。「アーダメだ」と情けない声を出す。助詞は苦手だそうだ。

1月17日

朝から哲也が「痛い、痛い」と言う。右肩と右腕を抑えている。筋肉痛はその部分がよくなる前兆だと慰めたら、いや夕べ家の中で転んだと言う。腕が酷く腫れている。明日、初台で診てもらおうと一日安静にしていた。

1月18日

初台の石原先生から電話。右腕のレントゲンを撮ったら上腕頸部が折れていると。直ぐに初台に直行し、先生からの紹介状を持って新宿の国立医療センターの整形外科に。休診中の正田先生に出てきてもらった。単純骨折だからバンドで固定して三週間で付くはずとのこと。その間患部を動かさないようにと。赤羽の高木先生に経過を報告。一カ月間針治療はできないので先生は相当怒っている。男性の転倒骨折の大部分の原因はお酒だと判っているらしい。

1月21日

骨折は初台の整形外科医永江先生が毎週レントゲンを撮ってチェックするごとで落着。

恐らく日曜日に深酒をしてトイレの便器から立ち上がる時バランスを崩して右肩から落ち柱に腕をぶつけ（ぶつけた部分が内出血）体重を支えきれずに骨が折れたものらしい。とにかく様子を見ながら会話と足のリハビリを続けるようにとの指示あり。哲也はその後全く痛がらず、けろっとしている。不幸中の幸いだ。

2月11日

その後三週間が経過した。その間哲也は三角巾で腕を固定し、痛がりもせず、脚部強化のため毎日一時間以上も歩行練習をした。今日のレントゲンで骨折部は癒着したことが判り、三角巾も外してよいことになった。

2月16日

骨折が治ったので赤羽の高木先生のところへ四週間ぶりに伺った。哲也はしきりに「手よりも足を重点的にお願いします」と繰り返した。

果たして四週間の間に足指部が拘縮し歩きにくくなっていったらしい。先生によれば三センチ程足が縮んだとのこと。早速針治療で回復。哲也も大分楽になったという。言葉も積極的に多く喋るようになり先生も大喜び。今日の「六甲下ろし」は最高に明瞭だった。

2月17日

哲也は夕べ遅くまで発音（ラ行、サ行）の練習で苦しんでいたが、やつとラ行が発音できるようになった。長足の進歩である。この調子だと二月一杯で基本的な発音は終了するかもしれない。嬉しいことだ。

2月19日

針治療のお蔭で足の拘縮は相当治り、腕の屈曲も骨折前に戻った感じがする。哲也は自分で右足の土踏まずに重点的に針を打つことを要求した。そのツボは声を上げるくらいに痛いというか響くというか、効果があるらしい。

高木先生はそのツボを「哲ツボ」と呼んでいる。哲ツボは他に二箇所あり、哲2、哲3のツボと呼ぶが本命は哲1らしい。

プロ野球が始まったら神宮（ヤクルト戦）と仙台（楽天戦）に行きたいらしい。時間をかけて虎キチの仲間にメールを打っていた。私の在大阪の友人北西君に頼んで甲子園観戦も可能かもしれない。

2月25日

高木医院への途中、私は無理に買い物の用を作り、哲也とは赤羽駅で別れ一人でコスモス医院に行かせた。交通量も少ないし、問題はなかった。

3月3日

哲也は一人で一時間ほど外出した。近所の本屋に寄った由。だんだん自信がついてきたらしい。転倒が心配だが。

3月4日

石原院長先生と久しぶりに面談。いつもニコニコと気持ちの良い先生だ。腕のレントゲンを来週撮るとのこと。

言葉の練習が上手く行かなくて情けないと哲也。気長に頑張るようにとの先生からの指示。

3月7日～9日

哲也は一人で外出。コンビニで預金を引き出したりしている。

（東日本大地震）

3月11日

久しぶりに哲也の付き添いで、初台病院の待合室でリハビリの始まる時間を待っていた。国会中継のTVを見ていると見慣れない地震警報が画面に出て、十数秒後、正しくは午後二時四十六分に、経験したことの無いような大きな縦ゆれ振動が長く続いた。哲也と並んで椅子に座ってはいたが椅子の肘掛を手で

つかみ安定を確保した。一瞬、関東大地震がいよいよ来たのかと思った。直ぐに待合室の天井が落ちてくる可能性がないことを確認した。

哲也はじつと座っていて不安そうな様子を見せなかった。そのうち振動が弱まり、時間が来たのでそのままリハビリ室に呼ばれていた。

私はリハビリが終了するのを待ちながらTVの津波が各地を襲う悲惨な実況中継を全て見ていた。病院のスタッフの一名が、自分の出身の町が被害を受けているのを見て悲鳴をあげていた。

四時十五分に哲也を家まで付き添ってくれるケアマネージャーが約束通り初台に迎えに来た。地下鉄が運行を停止したので、やむなく自転車で来た由。

自転車をもったまま家まで哲也のエスコートは無理だと思ったので「私がついているから」とお礼をいって直ぐに帰した。

病院からの帰り道はバスもタクシーも来ないので、やむなく家まで歩くことになった。舗道にはどこからこんな人が出るのかと思えるような大勢の人がゾロゾロ歩く中、一時間半かけて家まで歩いて帰った。交差点という交差点には大勢の人が溢れ、自転車などを持った人は歩行に困難をきたしていた。

途中で休憩するにも、店と言う店はどこも満員で座って休む場所は無く、コインベンダーでコーヒーの缶を買ひ、立ったまま飲んで七時過ぎに帰宅した。哲也はよく歩いた。幸い家族は無事で、この日に限って哲也には私が付き添って幸いだった。

自宅の被害は軽微で、本棚の本が散乱したのと、庭の石灯籠の三キロほどある宝珠が落ちた程度であった。

3月15日

初台の帰り道、哲也は右足の外膝が痛いといいだした。地震のあった十一日に長く歩いたので筋肉痛らしい。その後帰宅してからは治った模様。

3月19日

赤羽からの帰途、新宿五丁目の大鳥神社入り口横の築地寿司好で寿司をつまんだ。哲也は自分の注文が板前に通じるので、会話に大分自信を持った模様。

3月20日

お彼岸なので、高田馬場の観音寺に祖父母の墓参。帰りは小滝橋から高田馬場まで哲也は良く歩いた。とにかく歩きたい意欲がある。

3月24日

本人の強い希望で二階の本人の元来の部屋にベッドを移設した。哲也は自分でTVとPCを接続し、BSの視聴を申し込み完全に独立の部屋が完成した。これで、病人扱いはやめて新しい段階に入る。ヨカッタ！

### 3月28日

私は八王子の東京セントラルラボラトリー訪問。牧原社長、原川課長に会いこれまでのご厚情を謝し、凶々しいがもう一年休職を延ばしてもらいたい旨を要請した。翌日の役員会で検討するが、本社在籍勤務は難しいとの回答だった。

### 4月2日

今日は哲也の誕生日だ。赤羽の針治療でこれまで反応の乏しかった右足がツボを刺されて大声で「痛い！痛い！」というほど反応した。高木先生は大喜びで「これで治療の成果が大きく進歩する」と太鼓判。

家の近くの抜弁天の焼き鳥屋に出かけて家族四人で哲也の誕生パーティーをした。哲也は四種の日本酒を飲み、帰り際に立ち上がる時にちよつとよろけた。このことは高木先生には内緒。

### 4月4日

哲也は一人で外出し家から新宿南口の東急ハンズまで買い物に行った由。行きは徒歩で帰りは西口からバスで帰宅した。おおいに自信がついた様子。明日からプロ野球の開幕だ。大阪の友人北西君に息子の哲也の甲子園行きを計画してくれるように要請し、快諾して貰った。持つべきものは良い友達だ。

### 4月12日

哲也は初台からはじめて一人で帰宅した。新宿西口まで歩き、そこからバスに乗った由。段々人間らしくなってきた。

### 4月13日

赤羽の高木先生から頂いた哲也のお誕生日祝いは、なんとか言う偉い神主さんの祝詞のCDだった。

国内旅行の話になり先生が奈良に言及した途端、哲也が「金魚！」と叫んだ。大和郡山は哲也の好きな金魚の産地だそうで、一回訪問を計画する価値がありそうだ。

### 4月14日

哲也の初台からの帰宅は午後六時十分。ヘルパーの富田さんの言によると六時から野球のテレビがあるから大急ぎで歩いたとのこと。

4月16日

赤羽での治療は順調にすすみ、先ず右腕がかなり早く持ち上げられるようになった。右足は土踏まずまでの麻痺が治り、針を刺すと痛がるようになった。あとは足親指の麻痺が取れば、歩行時の拘縮は解消するという。発声も大声になってきた。

六月三、四日に月曜会の合宿が御岳山であるので、それに参加すべくリハビリを強行継続中。哲也は痛いのを、自分で「我慢」といいながら堪えている。治る見通しが出て、目標とするイベントがあると本人もハッスルできるらしい。ポイントはモチベーションの与え方とによりも本人の努力だ。

4月23日

コスモスで針治療中に、哲也が右耳を指差してここに針を打ってくれということ右頬骨の下部と右小鼻の横に針を打つ。要するに顔の右半分の麻痺がまだ治っていないらしい。

針を打ったらこれまで発音できなかったバ行、パ行がスムーズに発音できた。これまで無理に発音させようと努力していたが、まだ麻痺が完治していなかったのだ。

あとはサ行タ行とラ行の完全発音が残っているが、これも時間の問題かもしれない。

4月27日

セントラル(株)から退職証明書が送られてきた。給料と退職金(六十万円)、株購入残金(百四十万円)の清算も終わり、国民健康保険、年金の切り替え手続きも終了した。会社には大変お世話になり、ご迷惑をお掛けした。順調にいったら役員くらいになれたのに。

これからは哲也もこれまでとは違った人生を歩むことになる。あと一年療養に専念し、来年の今頃から就職のことを考えることになるだろう。連休の間、針治療はお休み。

5月3日

初台でもし料理に関心があるなら都の障害者支援センターで講習があるからどうかと打診があった。将来、母親が居なくなると自炊が必要になるので準備のため。今回は遠慮した。哲也に嫁さんがきてくれると有難いのだが。

5月7日

針治療再開。哲也は待ちかねていたらしく、先生にいろいろリクエストして

いる。足に感覚が戻ってきたらしい。痛いけれど治りたいので我慢とのこと。

5月10日

雨の日。哲也は軽い傘を右手で抑えて肩に乗せ器用に歩く。近距離ならOK。本人も自信を持ったらしく帰宅後いろいろな傘を持ち出して持ち具合をチェックしている。新宿からタクシーで帰る。行く先を「抜弁天」と指示できたが到着地点の「バス停」は発音悪く、運転手は理解できなかった。バもスも発音が難しいようだ。

5月14日

右足の親指までは感覚が戻った。あとの四本の指を集中的に打針。先生によると哲也のリクエスト箇所は正確に経絡に合致して由。

哲也は奥多摩の御岳への月曜会の合宿をとても楽しみにしている。でも宿舍のお風呂に入れるかなあと心配している。風呂用のチェア持参のケースも考えなくては。

5月17日

今日は右足の親指以外の指も感覚が戻り、前回まで感じなかった四指が針を打つと痛いという。同時に右腕も寝たまま頭まで上げる運動もスムーズになり肩を中心とした腕の回転ができるようになった。「足と手は同じレベルで回復する」と高木先生。

先生から髪が伸びていると言われる前に、今朝哲也は床屋に電話して明日の予約を取った由。

帰り際に先生から次の土曜日からは付き添いはいらさないから一人で来るようにといわれた。先生からやっとお許しが出た。私も付き添いから解放されヤレヤレという気分。

5月21日

哲也は一人で赤羽のコスモス針灸院を往復した。先方への到着時間を見計らって先方へ電話して無事なことを確認した。先生が「一人で来てどんな感じ？」と聞いたなら「キラク」と返事した由。ヨカッタ！ 本人も親父の付添いは気詰まりだったのか？

6月2日

東京セントラル会社に最後のご挨拶。牧原社長が日野駅まで自ら運転して送っていただいた。中央線が高架になり景色が変わったと哲也。新宿の京王デパートでタイガースの帽子を買う。

6月3、4日

心待ちしていた月曜会の御岳合宿に参加した。天候は晴れで合計三十名が御岳山頂の山楽荘に集結した。ここは御岳神社の齋館で「宿坊神乃家」が正式名である。

川合玉堂、吉川英治などの書画、古民具や骨董が豊富で、小さな池の周囲の木々の枝にはモリアオガエルの卵の塊が数個あり、親蛙が鳴き交わしていた。

自己紹介の段になって、哲也が「ニヤキヤミユラテチュヤです」と喋りはじめた。簡単におわると思っていたが、意外にも「小咄を一席」と言ったのにはビックリした。「此処を囲ってくれ、へーイ。」「塀ができたね、カツコイイ(囲い)」。)

拙い発音だが満座の皆さんから励ましの拍手をもらい本人は大満足であった。昨年暮れの忘年会と違い、哲也も少しずつ会話に応ずることができた。

手摺りがないので広いお風呂には入れなかったが、大勢で酒を飲んで愉快そうだった。

その夜、哲也は自由に喋っている夢を見た由、会員の一人で全体の青樹先生が「きつと君の脳の中では喋る訓練をしているのだ。絶対に喋れるようになるからリハビリを焦らずに、続けるように」と励ましてくれた。皆さんにいろいろアドバイスされて幸せだ。

6月6日

今日から小学生新聞をとりはじめた。哲也は漢字とひらがなの関係がいまひとつ判らないので漢字に振り仮名のある新聞をとり、段落ごとにPCをつかって写し始めた。二百字を写すのに最初は三日かかったが、次の日は三時間で済んだ。目標は一時間。

哲也は、今度はテニスをした夢をみたという。足は装具をつけたまま、右手はほとんど動かないのに夢で見たとはいじらしい。そういえば、数個のボールとラケットは物置に入れたままだ。

6月14日

初台の菅原先生の面接時に御岳の小咄のことと、小学生新聞のことを報告した。先生は眼鏡をはずし感に堪えた表情で「素晴らしい！」と二回繰り返した。

6月19日

哲也と母親で渋谷のオーチャードホールのN響を聴きに行かせた。久しぶりの音楽会はどうだったかときいたが、同じ時刻に放映された野球を見たかかと答えた。演奏会のチケット代がもつたいなと思った。



7月12日

最近、哲也は一人で初台でも赤羽でも行けるようになった。火曜日の初台は、行きはケアマネージャーが付くが帰りは一人。

暑い最中フーフー言っただけで帰宅した。聞けば初台から全道程を歩いてきたとのこと。三月十一日の地震で交通機関が止まってヤムなく歩いたことを思い出した。暑い中自分の意思で歩いた。歩けたことは喜ばしいことだ。

7月13日

赤羽からの帰りも、通常のルートを帰らずに赤羽からバスで王子駅にゆき、そこから都電に乗って学習院下で渋谷行きバスに乗り換え、高田馬場何丁目で降りてオリンピックで買い物をして、西早稲田から大江戸線で東新宿まで来たという。

携帯電話でバスの時間表を調べ、交通機関を駆使しているところへ行けるようになった。本人の意欲も評価すべきだが、頭脳が戻ってきたのが嬉しい。

7月15日

その哲也が携帯電話を落してしまった。抜弁天からバスで高田馬場にゆき、JRで、池袋乗換えで赤羽にゆく途中のことらしい。JRの中で気付き、赤羽の駅事務所で落したことを告げ必要な書類に記載してからコスモ針灸院に行った。

不自由な言葉でよく用件を伝えられたと思う。針灸院では携帯を落したことを告げ、今日床屋の予約をしようと思ったが出来なくなったとしよ気ていたそうだ。

帰宅後インターネットでバス会社の営業所の電話番号をしらべ、母親に電話してもらったところ、小滝橋営業所に届いていたことが判り、母親と取りに行った。そこでの落とし主本人の確認の決め手は、待ち受け画面に金魚の写真を使ったことだった。帰りは嬉しくて高田馬場から二十分も歩いて帰宅したと、つき合わされた母親は消耗していた。

7月22日

「お父さん」と呼ぶので哲也の部屋にいったら、なにやらインターネットで交信している。阪神の応援サークルがあつて、神宮球場のヤクルト戦のチケットを纏め買いするので申し込みをしているところだった。

「お父さんも行く？」ときくので、OKした。

野球場のスタンドの階段を上るのがいやで、これまで行くのを躊躇していたのに仲間がいると急に積極的になる。友人とはいいいものだ。

7月24日

今年是我々夫婦の結婚五十周年だ。本来なら夫婦で地中海クルーズを狙っていたのだが、病人を家においてゆくわけにもいかず、哲也を連れて北海道へ特急カシオペアに乗って行くことにした。弟の晋也も便乗して同行することになった。七月三十一日出発の予定である。

初台友の会が渋谷のセンターであり、石原先生が講演された。会場で友の会の金光会長に挨拶した。去年のバス旅行の際はいろいろアドバイスして貰い、哲也は早く会長のように活動できればと思っていたが、今回お会いしてみると会話以外の肉体のほうは、哲也のほうが余程回復しているという印象をもった。若さの特権かもしれない。

石原先生の講演の内容

「石原先生は群馬大医学部出身の脳外科医。リハビリ科の経験はまだ二年。初台の病院は二〇〇二年六月オープン。発症から二ヶ月以内の患者を引き受けて、百五十日間まで入院させる。都内二十三区在住の患者が対象。患者の八十一%が脳梗塞、腫瘍、くも膜下出血。

スタッフ数は四百三十九名（通常なら三百床に相当）。実際は病床数百六十四床でケアに人数をかけている。麻痺は一〜六級（普通）に分類。とりあえず「四」までの回復が目標。足首を曲げる。足を後ろに動かす。手ならつまめるようにする。

機能回復、意欲向上、廃用症予防が主眼。やる気を起こさせること。自発性が大事。現状に耐えるだけでは不満足。褒めると機能改善が早い。本人の注目を聴く。話したい、手をうごかしたい。

回復期が終了すると介護保険のジャンルになる。病院としては、患者がもう良いというまで面倒を見るつもり」

これほど人間味に溢れた、徹底した方針と組織完備の病院は見たことはない。また初台友の会は毎月の会合、講演会、年二回の遠足などを通じて、患者や家族の共通の悩み、情報を共有することがどんなに大切で有効かを如実に示している。

7月26日

この日、私は外出して阪神対中日戦のテレビを見ることが出来なかった。帰宅して哲也に戦況を聞いた。「うん、阪神が勝った。新人の森田がツーランホ

ームランを打って同点になった。マートンがヒットで平野がバントして、鳥谷が三塁打を打って、新井がヒット打って二点勝ち越した」

発音はまだアヤフヤのところがあるが、これだけのことを一気に喋ったのを聞いて、私は感激して「よく喋れるようになったな」と褒めてやったら「いや、まだまだ」といいながら嬉しそうだつた。

哲也は北海道旅行を楽しみにしている。「羽田まで大江戸線でなんとかまで行ってそれから何線に乗り換えて」。面倒臭いから新宿からリムジンで行こうといったら「高いからダメ」ですと。

7月30日

いよいよ明日から大目標の北海道旅行である。コスモスの高木先生から「太つてもいいから美味しいもの沢山食べなさい」といつてもらった。「帰ってから絶食すれば体重はすぐ戻るから」と

7月31日（北海道旅行）

地下鉄を乗り継いで羽田へ。羽田で二時間待ってエアドゥ機へ搭乗。函館からのツアーバスは哲也の事情を話し前のほうの席にしよう。

高齢で車椅子の人、杖歩行のご夫人が各一名。スケジュール的にゆったりした行程である。ホテルで休憩後、外部レストランで夕食、暗くなってケーブルカーで函館山の山頂で夜景を楽しむ。ホテルの大浴場も足の装具をはずして数メートル歩き浴槽に身を沈める。御岳の浴場と違い、浴槽に手摺りがあるので助かる。

8月1日

函館の元町散策。坂道あり、階段ありの行程だったが、支障なく歩け満足そう。五稜閣タワー、大沼プリンスホテルでの食事、その後の湖畔の散歩も問題なし。

大沼公園駅から登別まで特急「北斗」での汽車旅。登別の「まほろば」という立派なホテルでの豪華なバイキングで毛蟹、花咲蟹、ずわい蟹食べ放題。ホタテ焼き、てんぷら、スイーツなど太るのは当たり前だ。

哲也は大浴場では二種類（鉄明礬泉、炭酸泉）の浴槽に入った。お風呂にも入り慣れた感じ。

8月2日

小樽での散策兼買い物に一時間半。地酒の試飲を楽しむ。札幌では駅前のホテルからタクシーで大通り公園までゆき写真を撮って、直ぐに徒歩で札幌駅まで引き返す。時間がなくなり、地下道を大急ぎで二十五分歩く。哲也は汗だく

になってどうにか間に合った。これもリハビリの一環と諦めてもらう。憧れの寝台特急カシオペアに乗車。

私はすぐに寝たが、哲也は途中でとなりの車両の展望車に移り、快適なシートに座って他の乗客と歓談したらしい。

車椅子のご老人はこれが最後の旅行と言いながら何回も旅行しているし、外国にも行ってきた由。哲也も外国に行けるかも。

8月3日

無事に上野に到着。流石に今日の赤羽の治療は休むと。こうして両親の金婚式記念の旅行は無事終了した。

8月6日

このところ哲也のリハビリ病院からの帰りが遅い。どうやら帰り道を自分で選んで遠回りしたり、新宿西口のビッグカメラを冷やかしてくるらしい。赤羽からも「今日はどう帰ろうかな」と寄り道を楽しんでいる様子。「今度は交通博にゆきたい」とせがまれた。

明日は哲也発症後二年目だ。一年目にはえらい目にあつたが今度はなんもないことを祈ろう。

8月7日

今日は哲也の発症記念日だ。去年は悪魔が憑いたようなイヤな目にあつたが今年は何事もおこらず丸二年を経過したことになる。三年経過したら正常に戻るかと心配もし、期待もしている。

8月11日

両国の大江戸博物館で開催されている「東京の交通百年博」に行った。

哲也は丹念に各展示を楽しんでみている。通常なら四十分から一時間くらいコースを二時間もかけてみる。蕎麦を食べて帰ろうという大江戸博物館の常設展示も見るといふ。「せっかくなのだから全部見なくちゃ」といわれて付き合ったが、父親の私が先にバテて腰掛けて待っている間に居眠りをしてしまった。「お父さん、眠いの？」と聞かれて苦笑い。本人が関心を持って積極的に外に出たいというのは良い傾向だ。

夜は、八月十四日にあるヤクルト対阪神戦について、「二人分のチケットをお願いします」と仲間にメールで連絡している。

机にはひらがなからローマ字への変換表を置いて、それを見ながらキーボー

ドを打っている。喋るほうも発音がおかしいところがあるが、日常のコミュニケーションは問題ない。

電車で席を譲られても小声で「ありがとう」とスムーズに言えるようになった。もっと相手に聞こえるような大ききさで喋ればいいのだが。それでも大進歩だ。リハビリの先生に感謝、感謝だ。

8月13日

週末はアルコールを解禁にしているので、哲也はご機嫌。今晚は飲みすぎた小樽で買った酒や、他からもらった梅酒その他をかなり飲んでフラフラになっている。

夜、トイレでバランスを失い右肩から前へ崩れ便器と壁の間に落ち込み身動きできないところを発見し、慌てて引き出そうとしたが、手足が複雑に絡み下手に引きずり出すと骨折しかねない。右半身不随とは不便で、立ち上がるのに力入れようがない。弟の晋也を呼んできて二人で慎重に引きずり出す。こんな泥酔状態では明日の野球観戦は無理だと思った。いつも調子に乗って飲みすぎて失敗する。まだ病人の分際なのに。

8月14日

本人はケロツとして起きてきた。身体の骨折もない。酒臭くもないし、昨夜のことは全く覚えていない。

神宮球場の6番入り口でチケットをもらう手順だったが、お仲間が現れない。哲也は携帯電話で先方呼び出し「今着きました」とはっきり話をしている。

この夜の神宮球場の席はネット裏の二階だった。三十段くらいの階段をやっと上って席に着いた。応援中は哲也も小声で応援していた。「誰も聞いていないだからリハビリのつもりで大声をだせよ」といったがダメだった。

それでも味方がヒットを打つと「ワー」と声を出し、タイガースの応援歌「六甲下ろし」を皆と合唱していた。やはり、大衆に入って行動を共にすると動きが積極的になるので、時間の許す限り外に連れ出すのがよいと思った。帰宅後哲也は昨夜のことを「ゴメンナサイ」と謝っていた。「日本酒はやめようかな」とも言ったが父親の私は信用していない。

8月16日

初台病院の受付で哲也は「コンニチワ」と大きな声で挨拶している。発音その他で大分自信がついた様子。

初台の菅原先生との面接では、北海道旅行や交通博覧会、神宮球場にいった報告をしたら驚いていた。

初台病院内部の三ヶ月ごとの会議で、哲也はリハビリを大分頑張ったとのこ

と。今後三ヶ月の様子を見て言葉のリハビリは従来通り週二回だが、手、足のリハビリは週一回に移行する予定とのこと。お陰さまでここまでできました。なおパソコン教室などの社会復帰のためのトレーニングを始めたらのアドバイスがあった。ソーシャルワーカーと物理療法士で近くの施設をリストアップしてくれるそうだ。

8月20日

テレビで阪神の野球観戦時、観客の「六甲おろし」に合わせて哲也も歌っている。阪神が勝利する度に、握手をするのだが、いつものように左手を出したので、「今日から右手だ」と催促したら右肩を持ち上げて握手しようとした。肘はあげられるが、手首は未だ上がらない。

9月11日

しばらく特記事項はなく哲也は安定してリハビリに精を出し、両親は安心して外出できるように事態が進展した。哲也も少しは喋れるようになり表情は明るい。

再び神宮球場のヤクルト戦を観戦。前回よりは余裕が感ぜられ、応援ソングも声を出していた。

9月12日

新宿文化センターで円楽、歌丸、の落語独演会にいった。哲也はニヤニヤして聞いていた。昨夜からの疲れもあり早めに寝たらしい。

八月十一日のNHKスペシャルで鹿児島大の河平教授の脳の活性化の番組があり、千件以上の電話など大反響があったらしい。その後NHKでフォロー番組を数回放映していた。

内容は、反復して患部を刺激すると脳からの刺激細胞が活性化して、数年間動かなかった手足が動くという勇気つけられる内容だった。哲也もDVDを撮り熱心に見ていた。その後アマゾンで関連の本を数冊購入し、ついにDVD付きのリハビリ本を購入した。

9月18日

コスモスの高木先生も関心を持ち、針による経絡刺激も同じ原理だと話しておられた。

9月19日

哲也が倒れた翌日に医療センターにお見舞いに来てくれた従妹の原田明子さんが漢方医学の留学先の台湾から一時帰国したので、ANAホテルで会食し

た。哲也が杖なしで歩き、スクワットをしてみせ、話もできるようになったので非常に驚いていた。顔つきも相当よくなり、身体も締まってきた。体重も父親と競争できるレベルにまで下がってきた。

飲酒後に体重が上がる事実が、毎日の体重測定データから明確にいえるので、哲也本人にも相当応えたいらしい。リハビリをしない日も体重が増えるので、運動不足を解消する必要がある。

9月24日

初台の菅原先生に鹿児島大の先生の治療法について聴いた。初台からも聴講生を出した由。結果はかなり難しく、全てに効果があるわけではない。教授の直接の治療を受けないと意味がない。ということだった。

10月7日

哲也が「わからない。駄目だなあ」といいながら二階から降りてきた。ひらがなの区別がつかないらしい。疲れている様子。自分で情けなくてひーひー泣き出した。「こんなことで泣くんじゃないよ」「今日わからなくても翌日できるようになるんだから、それが勉強なんだよ、今日はもう寝なさい」と言ったら突然わーと大声で泣き出して二階に戻っていた。

10月8日

翌日高木先生が「どうも熱があるらしい。風邪をひいてるのでは」と言う。そういえばと、夕べの話をしたら、「体調が悪いと勉強しても頭に入らないし、全てが悲観的になるのよ」とのこと。本人も納得していた。

11月6日

昨年と同じ行程のバス旅行に参加した。友の会の機関紙「きらら」に次の感想文を寄稿した。

友の会バス旅行（河口湖）に参加して

中村 晃也（哲也の父親）

『今回の旅行は、昨年（平成二十二年）の奥只見湖の旅行に続く二回目なので、前回と異なり、息子の哲也も精神的にもリラックスして参加しました。』

お陰さまで、この一年の間に歩行は杖を突きながらですが、常人と同じスピードで歩けるようになり、話すほうも、不正確な発音ながら、ボンボンと単語を連ねるようになりました。バスの中の自己紹介では、たどたどしいなかで

も「中村哲也です。独身です」と挨拶する余裕を見せました。右肘は肩の高さにあがるようになりましたが、指はまだ全く動きません。

ホテルで同室になった林会長代行から、左手を添えずに右手だけを動かす努力をして、脳に右手を動かす指示を出させるように、とのアドバイスを頂き、早速右手だけを動かす訓練を始めました。

夕食後、カラオケの会場から、思いがけず哲也の歌声が聞こえてきました。介護士の岡野さん、取出さんに助けられて「亜麻色の髪の乙女」を歌っているのです。

二年前の発症以来、人前で歌う息子の声など聴いたことがなかったので、私は息子の写真を撮りながら胸が一杯になりました。林副会長さんが私の肩に手を置いて「中村さん、よかったね」といわれたときには涙が止まらなくなりました。

一曲歌って、哲也は心（精神）も喉（肉体）も解放されたのか、二次会のカラオケでも皆様がお集まりになる前に、阪神ファンの介護士藤林さんと一緒に「六甲おろし」を歌い、続いて「名残り雪」、「雪国」と、これまで忘れていた曲が次々と湧き出してきたようでした。

最後に、どなたかの沖縄風の合の手が加わった「島歌」を、皆さんの手拍子に乗って大声で歌い切りました。歌い終わって、皆様の歓声と拍手を受けたときの、哲也のこれまで見たこともないような嬉しそうな笑顔を見て、このバス旅行に参加して本当によかったと感じました。

急に歌に目覚めた哲也は、帰宅後も自分の部屋でUーチューブと一緒に大声で歌ったり、その後の病院への往復のバスの中でも鼻歌などが聞こえるようになりました。

今回も旅行中に示された大西先生、スタッフの皆様の献身的なご助力には全く頭の下がる思いで、感謝の念で一杯です。この旅行の効果は絶大で、また機会があれば積極的に参加させる所存です。今後ともよろしくお願いいたします。』

(続く) (12805文字)



